

玉鬘の物語から謡曲へ

高田 祐彦

『源氏物語』の玉鬘の物語は、主としていわゆる玉鬘十帖、すなわち玉鬘巻から真木柱巻に語られている。幼い頃、筑紫に下った玉鬘が、成人した後むくつき求婚者大夫監から逃れて船で都をめざす、そして、長谷寺に詣つた後、光源氏の六条院に引き取られ、源氏の演出による求婚譚を経て鬘黒との思いもよらぬ望まぬ結婚をする、というのがその概略である。

筋立ては以上のものであるとして、では、『源氏物語』という長編の中で玉鬘物語がいかなる物語か、ということになると、実は意外に捉えにくい。ここでは、源氏と玉鬘の恋のありようと、玉鬘の存在全体に関わるさすらいの問題、という二つの視点を据え、これらの視点から、玉鬘の物語について素描を試みたのち、謡曲との関係に及ぶことにしよう。

源氏の玉鬘への恋は、その基底に夕顔への慕情を持つ。玉鬘巻冒頭は、「年月隔たりぬれど、飽かさりし夕顔を、つゆ忘れたまはず」と、末摘花巻と酷似した表現によつて、太政大臣まで位を極めた源氏の、長く語られなかつた

内面を掘り起こしてくる。しかし、夕顔の「ゆかり」という要素は、けつして持続的に玉鬘との恋に関わるものではなく、むしろ、一つの梔子に過ぎない。栄華の蔭で満たされぬ思いを出発点に、新たに源氏の特異な恋が描かれようとしているのである。

源氏の玉鬘への恋には、もう一つ〈擬似的な娘〉への恋、という、いささか危険な側面がある。それは、玉鬘への恋が始まることではなく、薄雲巻に描かれた斎宮女御への思慕の時点からすでに生まれていた。斎宮女御は、六条御息所の遺言による養女であり、玉鬘は亡き夕顔の遺児として源氏が親を演じる擬制的な娘である。

このような複雑な源氏の玉鬘への思いは、源氏が求婚譚の演出者でありながら、いつのまにか出演者にもなつてゆく、という皮肉な展開の上で描かれる。

『源氏物語』で本格的な求婚譚が展開されるのは、玉鬘の物語が最初である。そこまでの物語は、むしろ、主人公である光源氏と複数の女君との物語という構図で進んできた。こ

の点、『竹取物語』や『うつほ物語』が、かぐや姫やあて宮への求婚譚を中心に据えていたのとは、対照的である。それらの物語において、お定まりのものであつた求婚譚は、ここでは、意識的な操作のもとに、源氏と玉鬘との恋を描くために機能している。蜚宮、柏木、鬘黒といった求婚者それぞれの面影も興味深い。しかし、むしろその列に加わつてゆく源氏の姿と、その源氏の思いに困惑しつつ次第に心を寄せてゆく玉鬘の姿こそが、求婚譚の中心になる。もちろん、玉鬘が普通の意味で源氏に心を寄せていたわけではなく、〈父〉を装いつつ近づく源氏に対しては、「ふるき跡をたづぬれどげになかりけりこの世にかかる親の心は」(蜚宮)という歌に象徴されるような困惑や嫌悪も多かつた。

しかし、この二人が結ばれるべくもないことは、たとえば源氏が内大臣の婿になるはずもなく、また、紫の上の理想性がくり返し述べられ、源氏と紫の上との間柄に揺るぎがないと強調されることから明らかであろう。一種の袋小路の恋、それが玉鬘物語の大きな主眼であつた。『竹取物語』の帝とかぐや姫にもなぞらえられる二人の稀有な心の通い合いは、鬘黒との結婚後も含めて、もの悲しくも美しい世界を生み出している。二人の姿は、とりわけ、篝火巻から野分巻にかけて、妖しいまでに美しい。

けれども、源氏の支配する求婚譚という枠組みは、意外にも鬘黒の果敢な行動によつて

破綻する。そこに、運命に翻弄される玉鬘のありようが典型的に表されることになる。ここで次の「さすらい」の問題に移ろう。

玉鬘の半生が「さすらい」の性格を帯びていることは、誰の目にも明らかであろう。幼時、母夕顔は、頭中将の正妻からの迫害を逃れるため西の京に移り住み、そこに玉鬘を残し、五条へ移った。その後、夕顔が消息不明のまま、玉鬘を養育する乳母は、夫の太宰大式に従って筑紫へ下向する。その折、四つになつた玉鬘が「母の御もとへ行くか」と尋ねた（玉鬘巻）のは、まことに哀切である。成人後、大夫監の求婚を逃れ、石清水八幡に参り、初瀬に詣でたのち六条院に入るものの、その六条院も安住の地ではなかつた。

筑紫を出た折の、玉鬘の「行く先も見えぬ波路に船出して風にまかす身こそ浮きたれ」という歌は、どこか遠く浮舟をも思わせる歌である。船に乗るということが、「浮きたる」身の上の象徴なのであろう。謡曲「玉鬘」がそこに一つ焦点を定めていることは疑いない。夕顔もまた、さすらいの運命に生きた。源氏との逢瀬の折、名を問う源氏に対して「海人の子なれば」と答えて、名のらない。これは、「白波の寄する渚に世をつくす海人の子なれば宿もさだめず」（『和漢朗詠集』）という歌の一節で、『和漢朗詠集』では、この歌は「遊女」の項に入る。宿も定めぬ運命、それは、母から子へと受け継がれて行く。その点においても、わずかではあるが、浮舟とその母中将の

君との境遇にも通うところがある。

とはいえ、玉鬘のさすらいの問題は、必ずしも主題として追求されているとはいいがたい。玉鬘十帖は、むしろさまざまなドラマや場面を次々に仕掛けてくるところに特徴がある。初瀬での玉鬘と右近の邂逅、螢の光で玉鬘の姿を照らす趣向、夕霧による女君たちのかいま見、玉鬘と内大臣との親子の対面、等々。それは、玉鬘の登場から退場への物語が、六条院をめぐる私的な出来事として、少女巻での源氏の任太政大臣と藤裏葉巻での准太上天皇の実現とをつなぐ位置にあるためであらう。玉鬘の嘆きや苦悩が描かれていても、それを深めて物語を展開してゆくのではないのであつた。

そこで、目を謡曲に転じると、しばしば言われるように、『源氏物語』の内容と比較した場合、謡曲「玉鬘」が、玉鬘の妄執を描くことは、違和感をもたらず。玉鬘の妄執は、それじたい物語に描かれているものではなく、また、物語の内容から容易に推測できるものでもない。しかし、運命に翻弄されて、くり返し不如意な境遇に置かれつつける玉鬘から、その奥底にわだかまるものを探り出そうとするのは、むしろ自然であらう。「恋ひわたる身はそれなれど玉鬘いかなる筋をたづね来つらむ」という、玉鬘の呼称のもととなつた歌は、光源氏が玉鬘と初めて出会つた折に手習に書き付けたものであつたが、謡曲の中にも裁ち入れられている。「恋ひわたる」「いかなる筋

から「つくも髪」を経て、「払へど払へど執心の、長き闇路や黒髪の、飽かぬやいつの寝乱れ髪、むすばはれゆく思ひかな」と、髪の毛チーフによつてつながつてゆく。そのことばの中に玉鬘の妄執が舞われるあたり、母を恋い都に上り、六条院を離れたのちは源氏を恋う、玉鬘の心の深淵をのぞき込むような思いがする。ここに髪の毛チーフが出てくることは、源氏が玉鬘の髪を撫でる場面（螢、篝火）とも関わつていようか。

そのうえ、謡曲の場面としては、初瀬川にとどまつているため、妄執との関わりがわかりにくいのが、いまだ六条院における苦悩を知らない段階でありながら、まさにその段階で、その後の苦悩を予感的に先取りした形にもなっている。初瀬の美しい景への賛嘆が、観音の靈験に対する玉鬘一行の期待の象徴である反面、玉鬘の妄執は、現実にはたやすく御利益を得られるものではなかつた玉鬘の人生によるものであろう。この靈験譚の無力さという点にも、玉鬘の物語と浮舟の物語との関連を見ることが出来る。玉鬘は、総じて身の処し方のすぐれた女君として、光源氏からも讃えられているが、その心の奥底を妄執という形で取り出したところに、禅竹の深い読み込みがあつたと見てよいだろう。

（青山学院大学文学部教授）